

Ja-Net

季刊ジャネット

スリーエーネットワーク

April 2026

No. 117



葵祭

Contents

- 4 あちこち日本語ご紹介
大阪府 大阪市
- 5 みんなの“日本語View from the Other Side”
具英姫 (韓国)
- 6 教材紹介
『自分の考えを伝える作文練習帳
—外国につながる生徒のための日本語—』
『歴史からひも解く日本語教育の世界—古代から現代まで—』
- 8 インフォメーション

巻頭寄稿

公立高校で学ぶ外国ルーツの生徒のための教育支援

東京都立町田高等学校 定時制課程

主任教諭 角田 仁

外国ルーツの生徒の受入れと課題

公立高校は義務教育ではないという理由で、これまで日本語指導・支援の必要な生徒の受け入れに消極的であった。その根拠となったのがいわゆる「適格主義」であり、高校はそれぞれの学校が定めた学力基準に達した生徒を受け入れ、達しない受験生は入学させない、というものである。高校に入学し、授業についていくため、一

定以上の日本語力がない生徒は受け入れることができない(入学に適格な資質を備えていないとみなす)というのも「適格主義」に基づく考え方で、母国・出身国において高い学力であった外国ルーツの生徒であっても、日本語力がなければ日本の公立高校で学ぶ機会が失われてしまうことになる。外国ルーツの生徒が増えてくるとともに、文部科学省は自治体に入試方法の弾力化を促し、外国ルーツの生徒の受け入れをすすめてきた。しかしいまだ多くの自治体が従来の入試方法を続けている。入試の多様化は多様な生徒が

高校に通い、学ぶために必要な取り組みと言える。

都立高校では、現在12校が外国ルーツの生徒を対象とする在京外国人生徒等対象入試(在京枠入試)を実施し、245人の募集枠を設けている(2026年4月入学生対象)。在京枠入試の実施校は、これまで全日制高校のみであったが、2025年からは3部制単位制の定時制高校が新たに、80人の募集枠を設けた。また、都の教育委員会も在京枠入試のための説明会・相談会を2024年度から数回に分けて実施するようになり、在京枠入試を受ける資格があるのか、受験生の審査をするための相談受付も年3回実施している。いずれも予想を超え多くの親子や支援者が参加している。2026年1月と2月に実施された在京枠入試では、

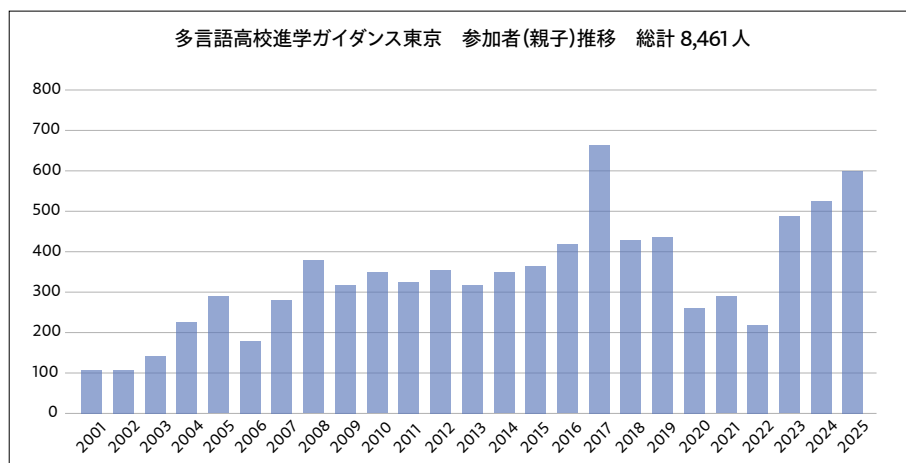
定員245人のところ応募が486人にも
のぼり、2年連続で240人を超える不
合格者が出た模様である。在京枠入
試募集定員枠数が圧倒的に不足して
いると言える。在京枠入試の実施校
以外でも、来日時期によって「措置」と
呼ばれるルビふりや辞書持ち込み、時
間延長などの入試時の配慮が申請に
よって受けられる。しかし配慮が必要
な受験生に事前に情報が確実に行き
渡っているのか定かではない。

多言語高校進学ガイダンス

2001年に東京でも多言語高校進学
ガイダンスがスタートし、東京に先駆
けて実施していた神奈川の関係者や、
近隣の千葉、埼玉の教員や支援者と
情報交換をしながら開催することがで
きた。これまで25年間で約8,400人の
外国ルーツの親子が参加している。
現在、都内の6か所で地域の支援団
体と高校の教員、国際交流協会、学
生団体等が協力して高校入試の説明、
外国ルーツの若者の体験トーク、個
別相談などを柱にして、多言語での通
訳を介しながらガイダンスを開催し
ている。教育行政の支援が行き届か
ないところは、さまざまな団体と個人
の尽力によって支えられている。

学校での課題とは

高校入試のハードルを越えてきた
外国ルーツの生徒たちにとって、高校
生活は充実したものになっているのか。
文科省によれば、高校中退が増加し
ているとのデータがある(日本語指導



多言語高校進学ガイダンスは、コロナ禍による参加者減少ののち、再び参加者が増えている



国際交流サークルの部活動風景。外国ルーツの生徒と日本人生徒の部員を地域の桜美林大学生がサポートしながら百人一首などを楽しんでいる



2024年11月、文化祭でのフィリピンルーツの高校生の発表

の必要な高校生の中退率は8.5%で、
全高校生の約7.7倍、2023年度)。
なぜ高校中退に至ってしまうのだろう
か。原因の一つが日本語の壁である。
勉強だけでなく学校生活を送るため
にも日本語は必要である。都立高校
のなかでも在京枠入試実施校は外国
ルーツの生徒の受け入れを前提にし
ており、日本語支援のしくみ、教員配
置や予算配分などが他校よりはすす
んでいる。しかし100人を超す外国
ルーツの生徒が在籍している高校も
ありさまざまな課題に追われている。
他方で、在京枠入試実施校でない学校

は、学校ごとに取り組みの温度差が
大きい。学校の方針とともに、管理職
のリーダーシップ、教職員集団の姿
勢によって取り組み状況が左右され
ると言ってい。

また都立高校は管理職(数年)と教
職員の異動(新採3年・通常6年)が
制度化されており、外国ルーツの生
徒に関わる意識が高く、教育・支援
に前向きな管理職や教職員が異動し
てしまうと、もろもろの活動が停滞
してしまう学校もある。その意味で、
教育委員会の支えは大切である。

生徒の孤立化を避けるために

高校に入学した生徒たちにとって、
日本の高校生活は未知のものであろ
う。学校のしくみ、カリキュラムの
内容、授業の方法、ホームルームや
学校行事、特別活動、部活動など慣れ

仲間と励まし合い、
共に歩む環境を作るために

ないことが多くあるはずである。高校では単位を修得することで進級・卒業できるしくみ(最低74単位必要)だが、1単位あたりの年間欠席限度数の定めがあり(学校ごとに異なる)、この数字を超過すると単位不認定になる。中学校との大きな違いである。これまで欠席限度を超えて学校を去らざるを得なくなった生徒を多く見てきた。さらに大切なのは友人ができるかどうかである。これまで多くの外国ルーツの生徒が高校中退を余儀なくされたが、その生徒たちの多くが話し相手ができずに孤立していた。とくにルーツを同じくする仲間がいない少数言語の生徒たちや、大人しい生徒たちが誰とも話すことがないケースを多く見てきた。ことばの壁=コミュニケーションの壁は、人の孤立化を招くことにつながる。このためクラス担任だけでなく学校全体で温かく丁寧な学級・学校運営が求められる。やさしい日本語や母語を取り入れながら生徒との対話を心掛け、困りごとがないかなどを把握し、必要に応じて、多言語による保護者との面談や保護者会などに取り組むなどのケアが求められる。

生徒会活動や部活動に入ることは、孤立化を防ぐきっかけになり得る。バスケットボール部やバドミントン部、サッカー部などに参加して活躍し、居場所を見つけられる生徒たちを見てきた。部活動はクラス外の同じルーツの生徒や、同じスポーツや文化活動を趣味とする(共通の興味・話題を持つ)日本人生徒と出会うチャンスである。運動部だけでなく、いくつかの高校で、国際交流班、多言語交流部(ONE WORLD)、国際交流サークルなどの部活動の顧問として、外国ルーツの生徒たちの居場所づくりに取り組んできた。部活動に集う生徒たち



2025年12月の多文化共生教育ネットワーク東京の研修会の様子。外国につながる生徒の学校生活と支援状況に関する調査報告書をもとに、高校の現場の声や課題にどう向き合えばよいか討議した

は、同じルーツの仲間と励ましあい、日本人生徒と交流ができ、エンパワーメントされて、学校生活や学びに前向きになれる可能性がある。

学外と連携した日本語の学び

入学したばかりのあるフィリピンルーツの生徒は、いつも一人で学校生活を送っていた。教員たちからは寡黙な性格だと思われていたが、地域の大学の日本語教育の先生と学生さんたちの協力で、対話による日本語学習を重ね、やがて強みとなる母語(英語)を積極的に生かした日本語の授業が学習意欲につながっていった。文化祭では調べ学習を行い発表するなど、学校生活の後半から積極的に前向きな学習姿勢が育ってきた。彼はフィリピンの小学校に通っていたころ、活発な児童だったという。高校で彼本来の姿を取り戻し、日本の大学へ進学したいという意志が固まっていった。努力の末、大学進学がかない、現在は英語で行われる授業に学ぶ楽しさを感じている。地域の方の支援が、生徒の力になった一例である。

支援者のネットワーク

わたしの勤務校では地域に大学があり、支援のネットワークもできつつあるので、外国ルーツの生徒たちへの支援は比較的恵まれているように思う。一方で、同じ東京であっても地

域や学校の環境により、「外国ルーツの生徒の支援」に関わる教職員や支援者が、一人で悩みを抱えて孤立するといったことが起こり得る。

この問題を解決するため、2020年に有志と共に多文化共生教育ネットワーク東京を立ち上げた。このネットワークにより関係者のゆるやかなつながりが生まれ、東京の教職員と支援者、研究者、大学院生、弁護士等が集まり、外国ルーツの生徒を支えるための研修会や情報交換会、法律相談、教育進路相談、都教委との意見交換などに取り組み始めた。

増加を続ける外国ルーツの生徒へ、よりよい学びの環境と支援を提供するためには、関係者の連携と協力が益々重要になっていく。ぜひ日本語教師の方や日本語教材等の出版社にも支援のネットワークに加わっていただき、情報や意見交換の機会を持てたらありがたい。



角田 仁
(Tsunoda, Hitoshi)

東京都立町田高校定時制教員・日本語指導コーディネーター。文部科学省外国人児童生徒等教育アドバイザー。2001年から多言語高校進学ガイダンスに地域と協力して取り組んできた。2017年に外国につながる高校生のための進路ガイダンス、2020年に多文化共生教育ネットワーク東京の立ち上げに関わる。

違いが輝く教室をめざして

大阪府立大阪わかば高等学校

教諭 田川ひかり

大阪府生野区にある大阪わかば高校は、2020年度に大阪府の再編整備計画によりできた多部制単位制Ⅰ・Ⅱ部の定時制の公立高校です。2022年度からは「日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学者選抜」の実施校(通称「梓校」)の一つとなり、日本語の授業を数多く展開しています。授業では、段階的多言語読書プログラム、内容中心型の言語教育、ユニバーサルデザインの教科指導を柱とし、生徒たちの豊かな文化的言語的背景を生かすことを大切にしています。2025年10月現在、190名を超える多文化背景をもつ生徒が在籍し、そのルーツは約15の国・地域に及びます。来日間もない生徒、日本の小中学校で長く学んできた生徒など、さまざまな違いをもつ生徒たちが同じ教室で共に学んでいます。今回は、彼らの文化的言語的背景を生かした本校での取り組みをご紹介します。

母語でのスピーチ大会 「WaiWai! トーク」

大阪府では毎年、「WaiWai! トーク」という母語や継承語によるスピーチ大会(大阪府立学校在日外国人教育研究会主催)が開催されています。府内

の高校生が、自らの母語でこれまでの経験や思いを発表します。大阪わかば高校では、この取り組みを授業の中で行っています。日本語に縛られることなく母語で語ることで、教員である私たちも彼ら一人ひとりの内面により深く触れることができます。日本語でのコミュニケーションが難しいと思っていた生徒が、母語では豊かな表現で語ってくれたり、自分の将来について真剣に考えていたことを知ったり、日本に来て苦労したことやつらかったことを素直に伝えてくれたりします。何よりも、母語や母文化に自信を持てずにいる生徒にとって、母語教員の支えを受けながら自分の思いを言葉にしていく過程は、自分自身を肯定的に捉え直す大切な時間となっています。

多言語絵本の読み聞かせイベント

2022年から始まったこのイベントは、例年秋に生野区の多文化共生の拠点「いくのパーク(いくのコーライブズ

パーク)」で開催されています。生徒たちは、日本語と母語の両方を使って地域の子どもたちに絵本を読み聞かせます。多文化共生のまちである生野区には、多様な文化的背景をもつ家庭が多く暮らしています。生徒たちにとっても地域住民にとっても、顔の見えるつながりは欠かせません。授業では、地域の読み聞かせボランティアの方々から、読み聞かせのコツを教わります。中には、子どもと接するのが初めての生徒もいて、最初は声も小さく恥ずかしそうにしていたり、どのように関わればよいのか分からず遠くから見ているだけだったりすることもあります。しかし当日、生徒たちは学校で教員には見せない意外な一面を見せてくれます。積極的に母語で語りかけたり、子どもたちを前に精一杯コミュニケーションを取ろうとしたりする姿から、教室の外での学びを通して大きく成長していることが伝わります。地域の大人から声をかけられ、役割を与えられる中で、生徒たちは地域社会の中で受け入れられていることを実感していきます。

自分のことばで語り、人とつながる経験は、彼らにとってかけがえのない学びとなっています。これからも、その違いを大切にし合える場を育てていきたいです。



多言語絵本の読み聞かせイベント「いろんなことば&いろんなえほん de いくのっこパーク」の様子。主催はNPO法人IKUNO・多文化ふらっと、大阪わかば高校、生野区役所

みんなの“日本語View from the Other Side”

このコラムでは、学習者や日本語に携わる方の視点から話題をお届けします



具英姫（グ・ヨンヒ）

韓国釜山出身。東京学芸大学大学院、お茶の水女子大学大学院（博士後期課程満期退学）で心理学を専攻。公認心理師・臨床心理士。公立学校のスクールカウンセラー・メンタルクリニックの心理士として勤める傍ら、玉川大学・大手前大学で非常勤講師として心理学の講義を担当。

illustration 内山洋見

日本でカウンセラーとして働く

行きました。最初の実習先の小学校で出会った先生方や子ども達は先入観を持たずに私を受け入れてくれ、カウンセラーとしても心の通う経験をしました。その経験がきっかけでスクールカウンセラーとして働くことになりました。

スクールカウンセラーの仕事

今は公認心理師（国家資格）や臨床心理士のような心の専門家がスクールカウンセラーになれます。主な仕事は児童生徒のカウンセリング、教職員や保護者へのコンサルテーション（相談・助言）、緊急時の対応、研修や講話などです。総じて児童生徒が安心して学校生活が送れるように学校組織の中で支援する仕事です。学校は多様な背景を持つ人が属している小さな社会です。近年は、外国ルーツの児童生徒も増えており、ますます支援の重要性が高まっています。

外国ルーツの児童生徒を支える

発達段階や個人特性にもよりますが、マイノリティの児童生徒は自身のアイデンティティの確立とマジョリティへの同化の狭間に立っていることが多いです。私の場合、成人して自分の意志で来日したこと、明確な目標を持っていたことが、日本語学習や夢の

実現の大きな原動力となりました。しかし、発達途上の児童生徒は、自らの意志で来日したわけではない場合も多く、言葉の壁や母国の環境との大きな違いに戸惑い、学ぶ意欲や目標を見失ってしまうこともあります。こうした児童生徒にとって、関わる人が人生の目標やモデルになってくれることが大きな助けになります。それは親や教師の役割とも似ていると思います。外国ルーツの児童生徒の支援に関わる際には、親心（カウンセリングマインド）で寄り添い、接していただけたらと思います。

カウンセリングで大切なこと

カウンセリングは信頼関係が肝心の仕事です。言葉を用いて行われるカウンセリングで時には日本語が母語ではないことがハンディキャップになります。ボキャブラリー不足、不明瞭な発音、学校文化や家族文化への理解不足はスクールカウンセラーとしての信頼にも悪影響を与えるからです。

しかし、外国ルーツのカウンセラーであることがマイナスであるとは考えていません。私は言葉以上に表情や態度も大事であることを体感してきました。実際にカウンセラーには、クライアントの苦悩を知ろうとする態度が重要だとされています。もしかしたら私は日本語が第一言語ではないからこそ、相手の言葉を熱心に聴こうとする、相手の表情をよく見る、多様な文化を知るために様々な文化体験をするなどコミュニケーションの基本的なことを意識しているかもしれません。相手を理解しようとする気持ちと態度が、互いの距離を縮めるのだと実感しています。

日本でカウンセラーを目指す

カウンセラーになりたいと思ったのは映画や小説がきっかけです。会社勤めしていた20代後半、前から興味があった心理学を学びたいと思い日本への留学を決心しました。日本は欧米より韓国と心理的に共通点が多いと思ったからです。来日後は日本語学校で『みんなの日本語』や学校独自の漢字教材などを使って学び、日本語能力試験N1を取得、大学の教育学部（カウンセリング専攻）に入学しました。当時カウンセラーとして働くためには臨床心理士の資格が一般的で、資格取得のため大学院に進学、臨床実習にも

『自分の考えを伝える作文練習帳 —外国につながるのある生徒のための日本語—』

庵功雄 監修 志村ゆかり 著

B5判 79頁(予定) 1,320円(税込) 6月発売予定

津田塾大学

非常勤講師 志村ゆかり

対象と学習目標

外国につながるのある中学生・高校生(日本語初級レベル終了前後～)を対象とした教材です。

生徒たちには将来、時事等の話題に対し意見を持ち、周囲と意見交換したり、それをまとめて作文し、報告したりする力がとても重要になります。そうした力を身につけるため、「総合的な『考える力』の基礎を育て、考えたことを作文としてまとめられるようになる」というのが本教材の目的です。具体的には「自分の考えを引き出すために必要な思考のプロセスを身につけ、引き出した考えをひとまとまりの文章として言語化できるようになる」ことを目指します。

特徴と使い方

本教材の特徴は、「流れ」にあります。まだ時事等の話題に対して意見を持つことに慣れていない生徒たちが、それらの話題について、どう捉え、思考し、文章に表していくかといった「流れ」を身につけることに重点を置いています。そのため、段階を踏みながら生徒が思考を展開していけるよう、構成を工夫しました。まず、各課の課題に沿って“発想する”ための「考え方の流れ」を例示し、それを参考に生徒が着想した後、自律的に書くべき内容を選択し、それをアウトラインおよび作文に発展させていきます(全段階に例があります)。また、この教材では、他者と交流するよう促しています。発想が豊かになりますし、自分の書いた作文を共有して意見交換したり、ほかの生徒の書いた作文を参考にしたりすることで、思考の幅を広げ、論を展開する力を向上させることも期待できるからです。

具体的には「テーマを踏まえて、いろいろ発想してみる→発想したこと、何について考えるか決める→考えを深めたり広げたりする→それを文章にしていける→みんなで話して

刺激をもらい、自分の考えをさらに発展させる」といったステップを踏んでいきます。このような「流れ」に沿って進めると、日本語初級後半レベルの生徒でも、自分の意見を文章化し、発信する力を育てることができます。

なお、中高生にとって、身近な社会、文化、教養を扱い、それがやさしい日本語で書かれていることから『中学生のにはんご 社会生活編』(日本語教科書『中学生のにはんご』3シリーズのうちの2段階目)の本文が参考資料としてお勧めです(本教材のテーマも、この本文のテーマに沿ったものとなっています)。

学習支援の際の留意点

生徒の支援としては「待つ・引き出す・対話する・足場掛け・ほめる・寄り添う」の6つがポイントになります。そうした視点に立って書いた支援者の方向けの手引きが、スリーエーネットワークのウェブサイトから提供予定ですので、ぜひご利用ください。本教材の語彙リスト(英語・中国語・スペイン語・ブラジルポルトガル語の4言語翻訳付き)と日本語初級後半レベルの1課の作文例もダウンロードできます。

外国につながるのある生徒に限らず、子どもたちにとって、考える力を養い、それを言語化していく力の育成は生きる力として非常に重要なことです。本教材が、考えるトレーニングとして、そして考えたことを言語化するために習得した日本語を“使っていく”トレーニングとしてご利用頂けることを願っています。ぜひ一度本教材を手にとって、流れをご覧頂けますと幸いです。

関連教材

『中学生のにはんご 社会生活編』
および『中学生のにはんご』シリーズの
詳細はこちら



『歴史からひも解く日本語教育の世界ー古代から現代までー』

小川誉子美・合津美穂 編 日本語教育史研究会 著
A5判 181頁(予定) 1,760円(税込) 6月発行予定

古代から現代に至る世界各地の日本語教育の変遷を俯瞰する

横浜国立大学名誉教授

小川誉子美

日本語教育への注目はこれまでにない高まりを見せています。2026年の歌会始で敬宮愛子内親王殿下がラオスでの日本語教育を題材に和歌を詠まれたことは、その象徴的な出来事でした。文化の懸け橋であり、社会を支える基盤としての日本語教育は、国家資格「登録日本語教員」の新設によって役割も強化されました。

本書は、試験の必須項目でありながら広範ゆえに体系的な学習が困難な「日本語教育の歴史と現状」を体系的にまとめた入門書です。古代から現代に至るまでの歩みを一冊の中に描き出し、日本語教育の現在の姿と課題を、歴史的・社会的文脈の中で考えるための基盤を提供することを目的としています。日本語教員を目指す方や日本語教育の歴史について深く知りたい方へ、その変遷を順序だてて紹介します。

本書の構成

構成は大きく二部に分かれており、以下の内容を収録しています。

第一部 地域横断的にみた日本語学習・日本語教育の展開

第一章：古代から現代までの国内の展開

第二章：諸外国の日本語教育の展開

第二部 分野横断的にみた日本語教育の展開

第一章：戦前・戦中の国内外の教材や教授法

第二章：戦後の教授法や教材、試験など

第三章：国内の諸機関など

本書は、日本語教育の歴史と現状を切り離さず、一つの流れとしてその歩みを紹介するものです。第一部では、国内を5つの時代に、日本を含む世界を7つの地域に分けて、

時間的・空間的な広がりを見ながら各時代、各地の特徴を紹介します。戦前から戦後、さらに時代が移り変わるにつれ、日本語教育への期待や役割も変容します。

第二部では、教材や教授法の変遷から、多文化共生社会を支える諸制度や関連機関の役割について、言語教育デザインのガイドライン、試験、やさしい日本語、教師養成、管轄の省庁、自治体、日本語学校、地域の日本語教室、継承語教育などをトピックに歴史的な経緯を踏まえて紹介します。

さらに、本文では取り上げなかった、横浜ピジンや各地の日本語借用語、日本語教育で用いられる文法用語のルール、台湾の日本語世代、米国国務省日本語研修所、複言語・複文化主義などをテーマとしたコラム8編、資料の所蔵館やデジタルアーカイブ情報、年表も加えました。この年表は、2024年までの内容を網羅したもので、日本語教育史を俯瞰するための最新の基礎資料として活用していただけます。

日本語教育史を学ぶ意味

日本語教育学会の設立から60年、スリーエーネットワーク発足から50年。そして日本語教育史研究会の30年にわたる歩みを受け、今、その成果を共有する時が来ました。本書は、同研究会の気鋭の有志が議論を重ね、初めて日本語教育の歴史に触れる方々にも無理なく読みすすめられるように編まれた集大成の一冊です。

なぜ、日本語教育を学ぶために、歴史が必要なのか。現在が、過去の営みの積み重ねの上に成り立っているからです。先人の足跡には、現代につながる重要な示唆が秘められています。いま私たちが直面している課題も、過去との連続性の中で捉え直すことで、新たな視座のもとに浮かび上がってきます。本書が、日本史を日本語教育の側面から読み直す契機となるとともに、日本語教育の社会的・歴史的文脈について考える際の一助となれば幸いです。



みんなの日本語 初級Ⅰ 第3版 翻訳・文法解説 シンハラ語版	2,200 円	4 月発行
みんなの日本語 初級Ⅱ 第3版 本冊	2,750 円	4 月発行
みんなの日本語 初級Ⅱ 第3版 翻訳・文法解説 英語版	2,200 円	4 月発行
みんなの日本語 初級Ⅰ 第3版 翻訳・文法解説 ビルマ語版	2,200 円	6 月発行予定
自分の考えを伝える作文練習帳		
—外国につながるのある生徒のための日本語—	1,320 円	6 月発行予定
歴史からひも解く日本語教育の世界—古代から現代まで—	1,760 円	6 月発行予定
J L P T 読解N2 ポイント&プラクティス	1,650 円	7 月発行予定
みんなの日本語 初級Ⅱ 第3版 翻訳・文法解説 中国語版	2,200 円	7 月発行予定
みんなの日本語 初級Ⅱ 第3版 翻訳・文法解説 シンハラ語版	2,200 円	7 月発行予定
みんなの日本語 初級Ⅱ 第3版 翻訳・文法解説 ベトナム語版	2,200 円	7 月発行予定
みんなの日本語 初級Ⅱ 第3版 翻訳・文法解説 ネパール語版	2,200 円	7 月発行予定
みんなの日本語 初級Ⅱ 第3版 翻訳・文法解説 ビルマ語版	2,200 円	7 月発行予定

お知らせ

外国語入門シリーズ

外国語を学び始める方のための『10のレッスンでわかる 入門』シリーズに、「ブラジル ポルトガル語」が加わりました。「タイ語」「フィンランド語」「ポーランド語」も好評発売中。テキストが入手しにくい言語を中心に、今後10か国語以上の発行を予定しています。

<https://x.gd/tRVN0>



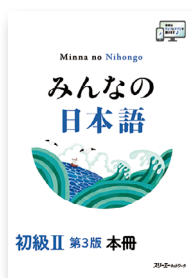
『みんなの日本語 初級 第3版』発行のご案内

この4月に『みんなの日本語 初級Ⅱ 第3版 本冊』が発行のはこびとなりました。『初

級Ⅰ 本冊』同様、音声はウェブサイトとアプリでご提供します。

改訂のポイントや具体的な変更点(会話場面・「問題」・語彙・表記など)、およびシリーズの発行状況と今後の発行予定などの最新情報はこちらの特設サイトをご覧ください。

<https://x.gd/UpSYk>



大森杯「日本語作文・スピーチ」世界大会

大森和夫・大森弘子ご夫妻が長年にわたり実施してきた『日本語作文コンクール』の精神を継承して行われるイベントです。世界各国・地域で日本語を学ぶ人々に、日本語で「書いて伝えること」「対話すること」を通して、自身の経験や思いを世界に発信・共有していただきます。

応募資格: 外国籍を持つ日本語学習者(国籍・居住地・年齢・性別・職業不問)

作文・スピーチのテーマ: 「私と日本」(600字前後)

受付期間: 2026年4月1日～5月31日

応募方法: 作文(スピーチの原稿)をメールで送付。作文審査で選ばれた52名は、追加で2分間のスピーチ映像をメールで提出。

送り先: oikawasensei@yahoo.co.jp

主催: 笈川幸司(NPO法人日本語スピーチ協会理事長)

審査方法などの詳細はこちら

<https://x.gd/HZ5mk>



表紙のイラスト

葵祭は京都の下鴨神社、上賀茂神社の例祭です。平安時代に起源をもち、毎年5月15日に王朝風のきらびやかな平安装束をまとった人々と牛馬・御所車が練り歩く「路頭の儀」が行われます。

季刊ジャネット

Ja-Net No.117

スリーエーネットワークという社名は、アジア(Asia)、アフリカ(Africa)、ラテン・アメリカ(Latin America)の三つの地域をネットワークでつなぎ、相互理解と友好促進を図ろうという趣旨をシンボライズしています。

2026年4月25日発行

● 発行人 藤崎政子
● 発行所 (株)スリーエーネットワーク

Ja-Net 編集室

〒102-0083 東京都千代田区麹町3-4

トラスティ麹町ビル2F

TEL: 03-5275-2722 FAX: 03-5275-2729

E-mail: sales@3anet.co.jp

<https://www.3anet.co.jp/>

● デザイン パーシック 畑中 猛

● イラスト 竹永絵里 (P.1, 8)

● 印刷 (株) マイナビサポート

© 2026 by 3A Corporation

Printed in Japan(禁無断転載)

『Ja-Net』をご希望の方はお名前・ご住所・ご所属を編集室までお知らせください。無料でお送りいたします。次号は2026年7月25日発行予定です。